

道頓堀ストリートに、金色の“えべっさん”が微笑んでいる。ローマの休日よろしく、その口に手を入れると「ゆっくり遊んでいきやぁ」「お腹すいたなぁ」とひとり言をおっしゃる。見上げたビルには、これまた大きなえべっさんの顔が看板になっていた…。

「道頓堀極楽商店街」は、浪花座跡のサミー戎プラザに2004年7月オープンした。ど派手な外観とは異なり、しっとり、夕暮れの昭和を思わせるレトロな街並みが、5階から7階まで3フロアにわたり広がっている。

「道頓堀にこんな所があったんやね、はじめて来たわあ」と驚く連れ合いとともに、入り口で記念撮影のあと、商店街を練り歩く。「元祖円タク 大阪タクシー、市内一圓均一」「オハヨー歯ぶらし」「大阪大穴競馬」などポスターの文字が、すべて右から左へ書かれ、時代を感じさせる。大福町、夢見世通り、恋街筋と、ネーミングも“極乐的”だねと話しながら、しょうゆやソースの香りに引き寄せられる。タコ焼きのワナカ、お好み焼きのオモ二、くわ焼きの九志焼亭、串かつのだるま。難波、新世界、生野などに本店のある有名どころばかりではないか。他にも明石焼きは長田、蜂蜜最中アイス三重、小籠包はなんと上海から初上陸という。わざわざ遠くまで足を運ばなくても、ここでいろいろ味わえる。食べなくては損だ。

自分で焼きたこ焼き店「蛸やくし」をのぞくと、「こういう風にコロコロしてね。」「どこから来たん？大阪おもしろいでしょう」と店のおばちゃんが懇切丁寧に若いカップルに指導している。お好み焼きの桃太郎に入ると、目の前の鉄板に出来立てを運んでくれた。「鉄板熱いから、やけどするよ」と店のおにいちゃん。玉子やじゃがいもの入った生地がふんわりとおいしい。たこ焼きやお好み焼きはB級グルメとよく言われるが、侮るなかれ、名店の味はA級である。ぺろりと平らげながら、大阪の“粉もんパワー”を再認識した。

街角には、ミルクせんべい売りの女の子が「いかがですか？1枚からですよ」と微笑む。くじ引きでもらえる枚数が決まるという。昔ながらの「わた菓子メーカー」も実際に動く。ちんどん茶屋「飴勝」に寄ると、店員さんが「こう見えても私、ちんどん屋が本業です」と話しかけてきた。「ちんどん太鼓の担当なんですよ」と指さす方には、本物が展示しており、珍しさに見入ってしまった。

ゲームコーナーではスマートボールに挑戦。新世界で体験したことはあるが、ここのはさらに古い。得点できる穴に球が入ると、スタッフのおじいさんが2個ずつ足してくれる。自己申告制で超アナログである。「この台はなあ、昭和二十数年頃から使ってたもんやでえ」とのんびり言う。ガラスなどがセロテープで継ぎ接ぎされているが、パネは健在だ。パチンコ台やドライブマシーンも、どうにかしたら壊れそうで貴重品を扱う気分である。

最上階の神社前は、縁日のような広場で、金魚すくい、わなげなど屋台が並ぶ。難しいのが「ごいし入れ」。斜めになったざるかごに碁石を掘り込むのだが、すぐ跳ね返ってしまい「そんなんじゃあかん！もっと手前からそーっと！」と名人おばちゃんの厳しい指導が。見知らぬ人にも声援を送りたくなる。「びん立て」はかなりの集中力が必要だ。「射的」も意外と当たらない。“パーン”と大きな音と手ごたえが本格的で、的に当たったら店主から「スッキリしたねえ」と声がかかる。

スタッフ・店員がそれぞれ個性豊かで、気さくに話せる雰囲気うれしい。何よりもてなす側がみな楽しそうである。おいしいモンを食べ歩いたり懐かしのゲームにチャレンジしながら、大阪らしいキャラクターの濃い人たちとのやりとりを体験できる「仕掛け」が特徴的である。

さらに、毎日、神社前広場で上演される「人情活劇ミュージカル」が圧巻だ。テーマは“夫婦げんか”や“いっちょ噛み”。いっちょ噛み

とは、深い知識を持っていようがいまいが、人や物事に積極的に関わろうとする姿勢で、大阪人気質そのものである。この商店街の住民である蝶子・吉次郎夫婦を中心とした日常の生活や人情ばなしが、宙乗りや電線滑りなどスペクタクルな演出で、スピーディに繰り上げられる。

ショーやパフォーマンスのため「道頓堀極楽歌劇団」が結成され、来場者を楽しませている。役者やダンサー、漫才師、音楽家など芸達者なメンバーに、脚本・演出は、OSK歌劇団などでも活躍の北林佐和子氏、音楽や振り付けなど多彩なスタッフが集結している。OSK出身者や落語、漫才、新喜劇といった大阪ならではの文化を担う若手が多く、キャストイングも日替わりのため、固定の追っかけファンが増えているという。ショーだけでなく街角のあちこちで、流しの三味線弾きや歌って踊れる美人姉妹などのパフォーマーが突如出没するのも面白い。6階にある100人収容の劇場「戎座」でも、演劇、演芸、講演会などが開催されており、昔「浪花座」があった地から、大阪ならではの芸能文化発信が行われている。

事業企画推進室広報責任者の金子大吉さんはこう話す。「スタッフが商店街の住人という感じで年齢層も幅広いため、ある意味、家族のようで仲がいいですね。若いスタッフが年配者に悩み相談をすることもあるぐらいで、そんな空気感がお客さんにも伝わって、親しみやすい印象を与えるのでしょう。」

戦災や高度経済成長以降、私たちは、昔ながらのまち並みを失い人と人との深い関わりを忘れ、同時にふれあいが自然と生まれるような安らぎの「場」も減っていった。この商店街では、それらが擬似的ではあるがしっかり再現されており、“食”や“芸能”の、人どうしの仲をとりもつ役割が強化されている。

道頓堀発「ぬくもりの人情テーマパーク」。新しい観光スポットであるが、まずは地元の

方に、ここで大阪人の原風景に触れながら目一杯遊んでほしい。大阪の“いっちょ嗜み”文化のよさを見直し、自分のまちで再生、発信する元気をつけて帰れたら、大阪や関西がもっと住みやすく楽しくなるかもしれない。